

佐藤 友美子

サントリー不易流行研究所部長

未来のための一歩・エコツーリズムへの期待

「沈黙の春」を書いたレーチェル・カーソンは甥と体験した自然の素晴らしさを「センス・オブ・ワンダー」に書き残している。「わたしたちは、嵐の日も、おだやかな日も、夜も昼も探検にでかけていきます。それは、何かを教えるためにではなく、いっしょにたのしむためなのです」と。荒れた海や雨降る森で二人が発見した自然の素晴らしさ、心が震える体験の数々は、忘れていた何かを私たちにも思い出させてくれる。

今、自然と一番近い位置にいるはずの子どもたちに変化が起こっている。東京の小学生が描いた未来の絵には、カプセルの中の植物や自然から隔絶された都市空間等、暗いモチーフが多かった。豊かな自然溢れる地域で育ったとしても、子どもたちが自然に親しんでいるとは限らない。テレビやゲームに費やす時間は都会よりむしろ農山村の子どもの方が多いとの報告がある。海に親しむことの少なくなった若い世代は海辺に対する親近感や期待値が上の世代より低いというデータもある。この国の多くの子どもたちは、大人の作ったルールに縛られ、自然の素晴らしさも厳しさも知らないまま大人になろうとしている。自然や文化を次の世代に受け継いでいくためには、子どもたちが理屈抜きで楽しむ機会と、体に染みるような濃い時間が必要だ。大人の役割は子どもを監視することでも、知識を教えることでもない。子どもを自然のリズムに委ね、発見の喜びを共有し、その知的好奇心に応えていくことではなからうか。

94歳の生態学者四手井綱英氏は「自然保護は直接教育するものではない、自然の中に入って、自然が好きになれば、自然保護的な考え方や行動は自ずと生まれる」と語る。少数の自然保護に熱心な人を育てることは容易かもしれない。しかし大事なことは私たち一人ひとりが自然と親しみ、自然に対する豊かな感受性を獲得することなのだ。20世紀には科学技術の進歩や都市を作ることに貢献した人たちが尊敬された。21世紀は自然に関わる仕事や、文化を伝えていく人たちが誇りを持てる社会でありたい。エコツーリズムが社会のシステムの一つとして定着し、エコツアーのガイドが若者の憧れの職業にならなければ、崇高な精神を持続させることはできない。

エコツアーに参加する私たちの一歩が、希望に向かう確かな一歩であることを信じて前に進みたい。